



一般財団法人

医療・福祉・環境経営支援機構

「経営者のための情報Note」 Vol. 113

		タイトル、及び配布例				
		病 院	診 療 所	歯 科 医 院	福 祉 施 設	一 般 ・ そ の 他
A	 Philosophy Note フィロソフィ ノート	<今月のタイトル> 『最低絶対基本線』を慣性とする(その2)				
		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
B	 Medical Note メディカル ノート	<今月のタイトル> 健診・検診情報、2022年度までの 標準化・デジタル化を提案				
			<input type="radio"/>			
C	 Dental Note デンタル ノート	<今月のタイトル> 時代の変化に対応した自由診療への取り組み				
				<input type="radio"/>		
D	 Welfare Note ウェルフェア ノート	<今月のタイトル> 地域共生社会に向けた3つの指針を提示				
					<input type="radio"/>	
E	 Environment Note 環境 ノート	<今月のタイトル> 排出ごみ 6年連続減				
		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
F	 Topics Note トピックス ノート	<今月のタイトル> 出生率1.42 3年連続減				
		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

「経営者のための情報Note」は、当財団より毎月提供いたします。



Philosophy Note

『最低絶対基本線』を慣性とする（その2）

杉田 圭三

■『最低絶対基本線』実践の在り方

1. 〈時を守る〉（時は“いのち”を根本認識とする）

〈時を守る〉根本を考えると、約束（＝時）を守ることは、相手の命（“いのち”）を無駄にしないことで、その実践が大きな信頼に繋がることに気付く（＝〔自己覚知〕する）ことなのです。また、物についても忠実忠実に手入れして使用時間（“いのち”）を延ばすことは、結果として、コストの削減になるのです。さらに、最も重要な経営資源の人間の命（“いのち”）を決して無駄にしないよう創意工夫・改良改善・革新を積み重ね、2時間かけている仕事を1時間で出来るようにすることが、生産性を高めることになるのです。

つまり、〈時を守る〉は、唯単に約束時間・納期・工期などを守るということに留まらず、視点を変えて、人・物・金・情報などの全ての経営資源の持つ“いのち”を守ると考えると良いのです。換言すれば、それぞれの“いのち”を活かし切るという根本認識を共通の価値観にする必要があるのです。

2. 〈場を清める〉（思い遣りの心をカタチにする）

場には、対象が必ず存在します。5S活動に代表される要るものと要らないものを分け、要らないものを捨てる「整理」、必要なものがすぐ取り出せ、かつすぐ戻すことが出来る「整頓」、そして、いつもきれいに保つ「清掃」などが私達に教えることは、対象に思い遣りの心で係わることの大切さなのです。日々の仕事でお世話になっている工場・事務所・機械・机などに感謝の気持ちを込め、思い遣りの心で清掃し、手入れをして大事に使わせて頂くことなのです。この実践が故障を減らしたり、長持ちさせたりすることになり、その結果として、修理・買替え等が少なくなり、生産性の向上やコストの削減をもたらすことになるのです。

つまり、〈場を清める〉は、一般的に清掃をすることで、5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）に代表され、その実践は、5K、物事に気付く、謙虚で感謝の心を持った感動の出来る資質を具えた人材を育成することになるのです。そして、その深層には、対象への思い遣りの心をカタチにすると言った大事な示唆があるのです。

3. 〈礼を正す〉（感謝の気持ちを行為で伝える）

儒教では、礼を最も重要な道徳的観念として説いています。具体的には相手（対象）に感謝の気持ちを行為で伝えることなのです。生存を可能にしてくれている大自然に「ありがとう」、生命を維持するために必要不可欠な食物に感謝して「いただきます」、社会生活を支えてくれる他者に感謝の意を伝える「おかげさまで」の言葉を発することは、基本中の基本、厳守すべき「基本行動」になります。「謙虚にして驕らず」の謙虚さは、「足るを知る」感謝の気持ちを育むことにより培われます。大自然の恩恵、自らの身体の活動、他者の支えなど、どれ一つ欠けても私達が生存することがままならないことになります。

つまり、〈礼を正す〉は、相手を敬い、挨拶や返事をするのですが、一步踏み込んで考えると、礼は対象となる森羅万象（宇宙間に存在する数限りない一切の物事）のお蔭で私達が生存出来るという現実^①に感謝することに始まります。従って、この「生かされている」という事実を謙虚に受け止め、感謝の気持ちを行為で伝えることが求められるのです。

■『最低絶対基本線』（時を守る/場を清める/礼を正す）の関係性

『最低絶対基本線』の時を守る、場を清める、礼を正すの〈三つの実践目標〉は、相互に係りを持ちながら人間の内発的な気付き（〔自己覚知〕）を促す働きを果たしています。その関係性を整理すると〈礼を正す〉は、〈三つの実践目標〉のコアとなります。それは、私達が日々何気無く、生活したり、仕事が出来ている背後には、無限の人々と、大自然の働きがあるからなのです。

この真実に気付く（＝〔自己覚知〕する）ことが〈場を清める〉思い遣りの心をカタチにする原動力となり、さらに全ての対象の“いのちを活かす”〈時を守る〉ことに繋がるのです。同時に〈時を守る〉根本となる人間の“いのち”や物の“いのち”（使用時間）を活かすには、〈場を清める〉対象を大切に扱う思い遣りの心と〈礼を正す〉感謝の気持ち、驕りのない謙虚さが不可欠となるのです。

このような関係性を認識した上での『最低絶対基本線』の実践が生命(いのち)あることに歓喜と感謝して、「限りある人生/共に限りない/真の豊かさを求めて」活動する好ましい組織風土を創り上げることになるのです。



Medical Note

健診・検診情報、2022年度までの標準化・デジタル化を提案

《政府、経済財政諮問会議》

政府の経済財政諮問会議は5月31日、会合を開催し、▼経済・財政一体改革（社会保障②）等、▼次世代型行政サービスへの改革、▼骨太方針の骨子案 —— について、議論した。

社会保障については、この日、有識者4議員連名で「新経済・財政再生計画の着実な推進に向けて～社会保障制度改革～」と題する提言を提出。地域医療構想の実現に向けた追加的方策、全国保健医療情報ネットワークの本格稼働に向けた対応策を含め、新経済・財政再生計画の着実な推進に向けて提案し、骨太方針2019に取組方針を盛り込み、改革を着実に推進すべきとした。提言は、①都道府県が主体的な役割を果たすガバナンス構造の確立、②次世代型行政サービスの推進、③インセンティブ改革の推進、④見える化の徹底・拡大、⑤改革の進め方 —— で構成。

次世代型行政サービスの推進については、社会保障分野における次世代型行政サービスの実現に向けて、目指すべき姿、工程、財源を明確にして着実に推進すべきとし、▼2020年度の本格稼働を目指すこととされている全国保健医療情報ネットワークについて、まずは、期限を定め、レセプトに基づく薬剤情報や特定健診情報を全国の医療機関等で確認できる仕組みの構築、▼生まれてから学校、職場に至るまでの健診・検診情報を2022年度までに標準化された形でデジタル化し、蓄積を推進するとともに、予防等への分析・活用を進める。マイナポータルを活用するPHR（Personal Health Record：個人の健康状態や服薬履歴等を本人や家族が随時確認でき、日常生活改善や健康増進につなげるための仕組み）との関係を含めて対応を整理し、早期の工程化 —— を掲げた。

会合では、根本厚労相が臨時議員として資料「2040年を展望し、誰もがより長く元気に活躍できる社会の実現に向けて」を提出した。2040年に向けて人材不足等の新たな課題に対応するため、I. 地域医療構想の実現に向けた取組、II. 医師・医療従事者の働き方改革、III. 医師偏在対策 —— を三位一体で推進し、総合的な医療提供体制改革を実施すると説明。医療資源の分散と偏在や医師の過重労働が認められる現況を非効率的な医療提供としたうえで、▼2025年までに医療施設の最適配置の実現と連携を実行し、地域医療構想を実現、▼医療機関における労働時間管理の適正化とマネジメント改革、▼上手な医療のかかり方に向けた普及・啓発と患者・家族への支援、▼医師の偏在是正の目標を2036年とし、地域及び診療科の医師偏在対策、▼総合診療専門医の確保等のプライマリーケアへの対応 —— 等を提示した。

全死亡者のおよそ3.6人に1人の死因が悪性新生物

《厚生労働省》

厚生労働省は6月7日、「2018年人口動態統計月報年計（概数）の概況」を公表した。2018年の出生数は、91万8,397人で過去最少（対前年比27,668人減少）であった。出生率（人口千対）は7.4で、前年の7.6より低下している。一方、死亡数は、136万2,482人で戦後最多（対前年比22,085人増）となった。

死因の1位は、「悪性新生物（腫瘍）」で、2018年の全死亡者に対する割合は27.4%であり、全死亡者のおよそ3.6人に1人は悪性新生物（腫瘍）で死亡している。2位は心疾患（高血圧性を除く）（全死亡者に対する割合15.3%）、3位は「老衰」（同8.0%）、4位は「脳血管疾患」（同7.9%）であった。



時代の変化に対応した自由診療への取り組み

■ 歯科医院経営の現状と問題点

歯科医院の経営環境は、人口減少や超高齢化社会による来院患者の減少と、他医院とのサービス競争の激化により年々厳しくなっています。

厚生労働省の医療施設動態調査によると、全国の歯科診療所の数は、平成30年1月68,791件～平成30年12月68,544件と年間で247件減少しています。なお現在では、平成31年2月末日で68,458件とさらに減少した結果となっています。

主な原因として保険診療収入だけでは、患者を多く診察しないと歯科医院経営が成り立たなくなっている点や、人口減少の影響により、多くの歯科医院が自然と患者が減少している点が挙げられます。また、過疎化の地域では、新規患者を獲得するのが、困難になってきています。

そこで、増収対策として自由診療を向上させる取り組みが考えられます。自由診療については、今まで、「患者が診療を望まれた時のみ実施している」や、「自院では、あまり勧めていない」といった、あまり積極的に取り組まれていない診療所も多く見受けられました。しかし、最近では、患者の「口腔内の健康を維持するための考え方」を前面に押し出し、自由診療を推進することに変化してきています。

■ “対処療法” から “予防歯科” へ

北欧スウェーデンは1960年代より歯周病の研究が始まり、歯周治療、予防、むし歯治療、インプラント治療等、歯科の各分野において世界の最先端をいっていることで知られています。イエテボリ大学が、むし歯などの口腔疾患と、歯科医によるプロケアや歯科治療後のブラッシングとの関連性について行った調査の結果、むし歯予防には、セルフケアとプロケアの両方が重要であることがわかり、これ以降、歯科治療では、それまでの「対症療法」ではなく、「予防歯科」がより重要であると考えられるようになりました。歯科治療は最小限にとどめ、口腔ケアに重点を置いたその手法は長寿化社会を見据えた、「患者中心型歯科医療」として各国のお手本になっています。

近年、日本でも国や地方自治体が、『歯とお口の健康』を重要視し、法律や条例の整備などを進めて「予防歯科」の考え方を広めています。その結果、歯科医院で定期的な健診を受ける人や、積極的に「予防歯科」に取り組む歯科医院などが増えてきています。

スウェーデンでの取り組みに比べ、時期こそ遅れていますが、「予防歯科」の機運が高まっています。

■ 1. 自費率向上の考え方

自由診療は、患者にとって最良の治療が提供されるということを十分に理解してもらうために、治療技術の向上、医療サービスの充実を図るとともに、自由診療に関する情報提供の量と質を増やし、まず患者の選択肢を広げることが必要です。

この選択肢の拡大が、結果として自院の増収へと繋がります。

■ 2. 自費率向上のポイント

自費率向上には、患者が自由診療への理解を深め、納得して受診して頂くことが求められます。その手順として、勤務医やスタッフが自費カウンセリングを行う場合、標準的な説明が出来るようにカウンセリングマニュアルなどを整備します。また、患者へわかりやすく画像などのビジュアル化したツールを提供することで、最善の治療計画を勧めることができます。

次に、カウンセリングを行う場合、訓練が必要です。一方的に話すのではなく、患者の状況を観察しながら、理解が得られているかの確認等のコミュニケーション能力を高める必要があります。そして、成功例と失敗例を集めてミーティングを継続的に行い、次のカウンセリングの改善に繋がります。

今までの歯科医院は、自由診療や介護保険といった保険外収入に力を入れなくても、安定した経営が出来ていました。これからは、人口が減少していくなか、何かしらの手を打たないと患者数は減少していきそうです。より一層多様化する患者のニーズに対応するため、より高度で先進的な治療が求められることとなります。そのためにも時代の変化に対応した自由診療を取り組み、自費率を向上させることが安定した経営に繋がると考えられます。





地域共生社会に向けた3つの指針を提示

～厚生労働省「社会保障審議会福祉部会」

厚生労働省は5月31日、社会保障審議会福祉部会（部会長＝田中滋・埼玉県立大学理事長）を開催し、「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進」、「社会福祉法人の事業展開等の在り方」について議論した。

地域共生社会とは、「人々の暮らしや地域のあり方が多様化しているなか、地域に生きる一人ひとりが尊重され、多様な経路で社会とつながり参画することで、その生きる力や可能性を最大限に発揮できる社会」と定義されている。厚労省は、この地域共生社会の実現に向けた検討の方向性として次の3つの指針を提示した。

①丸ごと相談（断らない相談）の実現

8050問題など、世帯の複合的なニーズやライフステージの変化に対応できるよう、新たな制度の創設を含め、包括的な支援体制の構築の検討

▽「断らない」相談支援、▽多様で継続的な「出口支援」（社会参加・就労支援、居住支援など）、▽地域における伴走体制の確保

②地域共生に資する取組の促進

地域住民など多様な主体がつながり、活動する地域共生の取り組みの促進

▽地域活動が生じるプラットフォームの形成・展開の支援等、▽民間からの資金調達の促進、▽NPO、社会福祉法人等の多様な主体による事業の促進、▽地方創生やまちづくり関係の施策との連携を促進

③高齢者も障害者も利用できるサービスの推進

高齢者も障害者も利用できるサービスの推進

▽介護・障害の実態を踏まえた社会参加や就労的活動を含むサービス・支援

これら提示された指針に対して委員からは、「地域共生社会の担い手となる人材の確保が非常に困難である」「仕事を退職した高齢者に参画してもらうための教育が必要だ」と、人材に関する意見が多数出た。

○社会福祉法人の連携・協働のメリットを提示

一方、「社会福祉法人の事業展開等の在り方」について、厚労省は、社会福祉法人数の推移や経営実態、制度改革の実施状況、地域における公益的な取り組みの状況、さらには「社会福祉法人の事業展開等に関する検討会」で議論された内容について報告した。具体的には、地域医療連携推進法人のような枠組みや社会福祉協議会中心の連携など、社会福祉法人が連携・協働しやすい仕組みづくりの方向性を提示したほか、▽人材確保・資質向上、▽地域における公益的な取り組み、▽地域共生社会の実現に向けた取り組み、▽人口減少地域における福祉ニーズ事業運営の効率化・安定化——など、連携・協働化することによるメリットについても説明した。

社会福祉法人に対しては内部留保をはじめ、「儲けすぎではないか」という声もあるが、「地域に還元できる余力のない法人が多く、特に小規模な特別養護老人ホームの経営は非常に厳しい。きちんとした分析を求める」といった意見も挙がっていた。



Environment Note

排出ごみ 6年連続減

■県民1人1日858グラム 分別進み意識浸透

県は2017年度の県内のごみ（一般廃棄物）の総排出量は前年度比0.8%減の230万4千トンで、6年連続で減少したと発表した。県民1人1日当たりのごみ排出量は同1.1%減の858グラムで、12年連続で減少し、都道府県別では4番目に少ない量となった。県資源循環推進課は「(物品の)再利用やシェアなどライフスタイルが変化し、ごみの分別も進んでいる。リサイクル法が整備され、意識も浸透している」とみている。(丹羽良平)

環境省の「一般廃棄物処理事業実態調査」に基づいて収集したデータを県が取りまとめた。17年度に家庭から出た生活系ごみの排出量は166万トンで、県民1人1日当たりには換算すると前年度比0.9%減の618グラム。事業所や飲食店が輩出した紙くずや生ごみなどの事業系ごみは、同0.3%減の53万4千トンだった。

市町村別で1人1日当たりのごみ排出量が最も少ないのは東秩父村で669グラム。上尾市が715グラム、富士見市が732グラムで続いた。一方、最も多いのは美里町の1169グラムで、次いで熊谷市の1117グラム、本庄市の1115グラム。東秩父村と美里町では約1.7倍の開きがあった。

リサイクル量は前年度比2.4%減の55万3千トンで、リサイクル率は24.0%となった。自治体別のリサイクル率は、可燃ごみのほぼ全量をセメント原料として資源化している日高市(99.7%)を除くと、最も高いのは宮代町の39.4%。最も低いのは松伏町の12.2%で、自治体間で最大約3.2倍の差があった。

最終処分量は前年度から3.6%減り、10万トン。そのうち県内で処分しているのは43.0%に当たる4万3千トンで、残りは県外で最終処分されている。今後、最終処分場の新規開設がなく、県外依存度が変わらないと仮定すると、県内の残余容量は約29年分となる見通し。

県資源循環推進課は「ごみの分別をしっかりと行うとともに、使い捨てプラスチック製品の使用を控えるなど、できるだけごみを出さないライフスタイルを心掛けてほしい」と呼び掛けている。

■回収地で種類に違い プラごみ

近年問題となっているプラスチックごみにも、削減への機運が高まっている。県は5月30日～今月8日に「埼玉県プラごみゼロワーク」を実施。環境保全団体などと協力して河川敷や市街地などでプラスチックごみを回収した。

県水環境課によると、期間中に川越市の新河岸川約1キロで行った清掃活動では、弁当や菓子パンなどのプラスチック容器103個、レジ袋55枚、飲料ペットボトル45本を回収。上尾市の鴨川約3.5キロでは、プラスチック容器243個、レジ袋213枚、ペットボトル25本を回収した。

観光地を流れる新河岸川と住宅地を通る鴨川での回収物を比較すると、新河岸川ではペットボトル、鴨川ではレジ袋の割合が高かった。同課は「各地の回収結果を分析し、啓発などに役立てていきたい」としている。(丹羽良平)





Topics Note

出生率 1.42 3年連続減

■人口動態統計 18年生まれ最少 91万人

女性1人が生涯に産む子どもの推定人数を示す2018年の合計特殊出生率は1.42となり、前年から0.01ポイント下がったことが7日、厚生労働省の人口動態統計（概数）で分かった。3年連続の減少。若い世代が減っており、安倍政権が掲げる「25年度末までに出生率1.8」の目標達成は厳しさを増した。10月から幼児教育・保育無償化が実施されるが、より実効性の高い少子化対策が求められる。

18年に生まれた赤ちゃんの数（出生数）は統計開始以来、最少となる91万8397人（前年比2万7668人減）となり、3年連続で100万人を割り込んだ。死亡数は2万2085人増加の136万2482人。出生数から引いた人口の自然減は44万4085人と過去最多で、人口減少が加速している。厚労省の担当者は「子どもを産みたい人が、安心して産み育てられるような施策を講じていく」としている。

母親の年代ごとの出生数は45歳以上を除く全ての世代で前年と比べていずれも減少し、「30～34歳」の世代では1万人以上減った。第1子出生時の平均年齢は4年連続で30.7歳のままで、晩産化の傾向が続いている。

都道府県ごとの合計特殊出生率は沖縄の1.89が最も高く、島根の1.74、宮崎の1.72が続いた。最も低かったのは東京の1.20。出生数が死亡数を上回ったのは沖縄だけだった。

結婚は6年連続で減り、58万6438組（2万428組減）で戦後最少。初婚の平均年齢は夫31.1歳、妻29.4歳で14年から変わっていない。離婚は3929組減の20万8333組だった。

死因は、1981年以来1位が続く「がん」の27.4%が最も多く、心疾患15.3%、老衰8.0%が続いた。自殺者は433人減の2万32人で、全体の1.5%だった。

■埼玉も下落 1.34 目標 1.50 達成難しく

県によると、2018年の県の合計特殊出生率は1.34（概数）となり、前年の1.36から0.02ポイント下落した。全国平均との差は17年の0.07ポイントから0.08ポイントへと拡大した。県の出生数も17年の5万3069人から18年は5万1241人に減少した。

県少子対策課は「減少は全国的なトレンド」としたが、人口100人当たりの出生数は全国23位に位置しており、「赤ちゃんの数は少なくない」と説明した。

それでも県の5カ年計画では22年までに合計特殊出生率を1.50とする目標を定めており、達成は難しい状況だ。

同課は出生率低下の要因を「未婚、晩婚の多さ」とみており、18年からは県民の結婚を支援する「出会いサポートセンター」を立ち上げた。現在までに9組が成婚しており、担当者は「結婚がただちに出産につながるわけではない」としながらも、「保育所の増設や子どもの居場所づくりと並行して産み育てやすい県を目指す」と述べた。（伊藤明日香）

■今後も出生数は減る 人口問題に詳しい中央大の山田昌弘教授（家族社会学）の話

若者の未婚率が高止まりし改善が見られないことから、合計特殊出生率は今後も1.4前後で推移するだろう。ただ、若い世代の人口が減っているため、生まれてくる赤ちゃんの人数は減り続ける見込みだ。子どもに十分な教育を受けさせられないことを懸念して2人目、3人目を諦める子育て世帯も多い。幼児教育・保育無償化が始まるが、効果は限定的だ。少子化対策に特効薬はなく、結婚支援や大学無償化、出産や育児がハンディにならない働き方の構築などさまざまな取り組みが必要だ。

※合計特殊出生率 15～49歳の女性の年齢別出生率を合計した数値で、1人の女性が生涯に産む子どもの数を推定する指標となる。人口を維持する水準は2.07とされている。1947年には4.54だったが、75年に2.00を割り込み、2005年には1.26と最低を記録した。その後、上昇に転じ、15年には1.45となったが、16年からは減少が続いている。